マムルーク朝時代のエジプト統治に関する研究
—ナイル治水と地方行政を中心に—

論文概要書

吉村武典

1．本論文の目的

本論文は、バフリー・マムルーク朝（1250–1382 年、前期マムルーク朝）における、ナイル川を利用した灌漑水利、治水とその管理・維持に関わりをもつ地方行政官の制度的な変遷を対象とし、14 世紀前半のナースィル・ムハンマド（al-Nāṣir Muḥammad b. Qalāwūn、在位 1394–95 年、1299–1309 年、1310–41 年）の第 3 期治世から、ブルジー・マムルーク朝（1382–1517 年、後期マムルーク朝）にいたる 15 世初頭までを中心として、政治・社会的変動が行政上の慣行に及ぼした影響について考察する。

本論文の対象とする 14 世紀のマムルーク朝統治下のエジプト社会はスルターン・ナースィル・ムハンマドによるイクター制の整備を通じて、外来の奴隷出身の軍事集団であるマムルーク軍人層が徴税対象である農村を支配する、いわゆる「マムルーク体制」が確立された時代とされる（佐藤次高 *State and Rural Society in Medieval Islam: Sultans, Muqta's and Fallahun* などの研究による）。このイクター制度は、10 世紀中ごろにアッバース朝（750–1258 年）カリフからイラク地域の統治を委ねられたブワイフ朝（932–1062 年）において始まり、12 世紀にザンギー朝（1127–1250 年）によりシリア地域に、そしてアイユーブ朝（1169–1250 年）の創設者サラディン Ṣalāḥ al-Dīn Ayyūb によりエジプトに導入された。ナースィル・ムハンマド時代は、このイクター制の整備（検地）を通して軍司令官であるアミールらマムルーク軍人を統制することで独裁的な権力を握り、マムルーク朝の最盛期を現出させた。しかし、彼の没後の 14 世紀後半以降のエジプト社会はアミールたちが権力闘争を繰り返し、同時に黒死病などの疫病の度重なる流行は同王朝の衰退を招いたとされる。その盛衰の諸相を明らかとすることは、マムルーク朝史研究の中心的関心のひとつである。

本論文の対象もエジプトの政治、社会が変容した 14 世紀であるが、その変容の過程をエジプトの灌漑農業をはじめとするエジプト独自の慣習との関わりから考察を行いたい。イクター制下のエジプト社会において、古来エジプトが有していた様々な慣習や文化が、イスラーム王朝下でどのように変容、維持されてきたか、つまり、外来の制度（本論ではマムルーク軍人とイクター制度）と特定地域であるエジプトが有する文化（本論ではナイル治水）とがいかに共生・融合したかを考察することである。以上の関心をもとに、14 世紀のマムルーク朝統治下のエジプトにおけるナイル川をめぐる政治的慣行を見ていくこととする。

２．先行研究

本論文が対象とする問題背景に関わる主要な研究について述べる。

レヴァノーニA. Levanoni の『マムルーク朝史における転換点—ナースィル・ムハンマド・イブン・カラーウーン第 3 期治世 *A Turning Point in Mmluk History: The Third Region of al-Nāṣir Muḥammad Ibn Qalāwūn (1310–1341)*』 はナースィル・ムハンマドの第 3 期治世を中心に、マムルーク朝の政治構造の変化を分析した研究である。この書においてレヴァノーニーはナースィル・ムハンマドをバイバルスＩ世（在位 1260–77 年）やカラーウーン（在位 1279–90 年）のスルターンの権力基盤の強化を図る諸政策の継承者であることを認めつつ、同時に彼らが築いてきたマムルーク朝の政治体制を質的に変容させたことを指摘している。それは、イクター制を通じてアミールら軍人の統制をはかりつつ、自らの権力基盤として育成したマムルーク軍団の政治影響力の増大を招き、没後の政治的混乱を招いたとする。

また経済的側面において、ナースィル・ムハンマド没後のマムルーク朝の経済的衰退は、黒死病による人口減少や自然災害による穀物価格の高騰の他に、すでにナースィル・ムハンマド時代から農工業の発展がエジプトでは頭打ちとなり、キプロスやイタリアなどのヨーロッパ側にエジプトに匹敵するかそれ以上の産業の発展が始まったことを一つの要因として挙げている。それに加え、ナースィル期の度重なる建設事業や農地開発も都市生活を繁栄に導いたかに見えたが、その維持に経費がかかりすぎたため、逆にナースィル・ムハンマド没後にはそれが維持できなくなり荒廃に帰したことを挙げ、ナースィル・ムハンマド治世の欠陥を指摘する。

また、財政政策の変化から 14 世紀後半から 15 世前半を後期マムルーク朝体制への移行過程として分析した五十嵐大介『中世イスラーム国家の財政と寄進—後期マムルーク朝の研究—』は、マムルーク体制の転換についての近年における極めて重要な研究である。五十嵐は、先に挙げた佐藤が軍事体制である「マムルーク制度」と土地行政制度である「イクター制度」を一体として捉え、マムルーク朝の政治・社会の構造変化を論じる点に疑問を示し、それらを別個に考察すべきとした。独裁的な権力を握ったナースィル・ムハンマドの没後は、有力アミールが権力を獲得するため増員した兵卒身分のマムルーク軍人達が政権を左右する政治集団となった。最終的には彼らの利益を代表するものがスルターン位に就く、15 世紀の後期マムルーク朝時代の支配体制が成立する。この背景のもとスルターンはマムルーク軍人らに富の分配を行うことで権力の維持を図ったが、五十嵐はこの支配構造の質的転換をマムルーク朝後期の財政制度の変遷の過程を基に明らかにした。この中で本論が対象とする 14 世紀後半が、15 世紀に続く後期マムルーク朝時代の「マムルーク体制」の基本的な構造が確立された時期とする。しかし、いずれの研究においてもイスラーム史上の政治体制の変化を中心におき、統治対象である支配領域内の慣習の変化については、政治体制の変化に伴う二次的な変化としてとらえている点で共通性をもつ。

一方、ユドウィッチをはじめとするマムルーク朝時代の西アジア、地中海域を対象とした経済史分野からは、14 世紀後半に始まる黒死病の流行を契機に発生した人口減少が及ぼした影響を重視する。ユドヴィッチによる論文「イングランドからエジプトへ 1350–1500 年 England to Egypt, 1350-1500: Long Term Trades and Long Distance Trade」において、14 世紀後半に見られるマムルーク朝社会の衰退は経済減退がもたらしたと指摘する。人口減少によって農村や都市の経済活動が停滞し、イクターから税として納められる農産物は工業製品より安価なためイクター収入を基盤としたマムルーク軍人層が経済的な打撃を受けた。その結果、イクター収入の減収を補うため過酷な徴税手段を採り、人口が減少した農村社会の荒廃に拍車をかけ、マムルーク朝の支配体制に影響を与えたとする。

最後に本論文の関心にかかわる研究として、ユドウィッチの論を発展的に継承し 14 世紀後半から 15 世紀のマムルーク朝エジプト経済の動向について農業を中心に分析を行ったのが、ボーシュ Stuart J. Borsch『エジプトとイギリスにおける黒死病：比較研究 *The Black Death in Egypt and England: A Comparative Study*』である。ボーシュは、イクター制下のエジプトの農村支配の特徴として、(1)イクター保有者の不在地性と血統による継承の不可、(2)直接農民との折衝に当たる徴税請負人の役割と農民支配の形態を挙げている。そして、ナイル川を利用した灌漑農業の特徴について、毎年のメンテナンスの重要性とその労力の多さ、13 世紀末から 14 世紀前半にかけての大規模運河の浚渫工事が果たした農地の拡大政策などについて触れ、ナイル川を利用した灌漑農業に完全に依存するエジプト経済の発展の脆さを指摘する。

黒死病の影響で発生した農村人口減少が、ナイル灌漑システムを維持していくことを困難にし、農村社会を荒廃させる要因となったとする。この結果、イクター受給者たちは収入を確保するために農地からの徴税を強化し、水利施設の維持のために農民を強制的に徴用したため、より農村社会の荒廃が進む結果となったとしている。また、農村人口の減少と農村社会の荒廃は、牧畜を営む周辺のウルバーン（アラブ遊牧民、ベドウィン）勢力を伸展させ、農地を牧草地へと転換させていった。上・下エジプト地域で、大きな勢力となったウルバーンは、たびたび反乱をおこし治安が悪化したため、ますます農地の回復は困難となる結果となったとする。黒死病の影響として、イクター受給者が農民への徴税を強化したとする結論については概ね他の研究と同様であるが、小麦価格と都市労働者の収入について取り上げ、エジプトの労働者の賃金に関して穀物価格は上昇するのに対し、賃金は 2 分の 1 から多くて 20 分の 1 へと下落することを指摘したことは、当時の経済状況を考える上で重要な示唆を含んでいる。

以上の先行研究を踏まえ、本研究では特に 14 世紀から 15 世紀にかけた変動期におけるマムルーク朝政府のエジプト統治の様相を考察するため、アラビア語の同時代史料（年代記、地誌、伝記集、行政書など）をもとに、ナイル川の灌漑農業、大規模水利、地方行政制度の変遷を取り上げて検討を行う。

３．本研究の構成

本研究ではこれまでの中央政府の動向に偏ったマムルーク朝の政治社会史に対し、エジプトという特殊な地理環境から発生した固有の慣習を通して、いかに支配王朝がそれに適応して地域（都市を含む）の管理を行ったかについて着目し考察を行う。第一にエジプトの固有の慣習としてナイル川の利用と王朝政府との関係を対象として考察を行う。ナイル川を利用した水利には灌漑農業、水運、都市部の飲料水の供給等が挙げられ、それぞれに王朝政府が関与した様々な水利事業が確認される。

本論文は、序章、第 1 章から第 4 章、結論によって構成される。

第 1 章では、マムルーク朝時代の政治慣習として、どのようにエジプトの地理的、歴史的特質を踏まえ管理・統制を行っていたかについて考察をおこなう。ナイル川およびエジプトの地理情報、定期的な増減水を繰り返すナイル川の水位測量の慣習が、先行する諸王朝から継承された部分とマムルーク朝時代の独自性について触れた後、マムルーク朝時代のナイル川を利用したエジプトの灌漑農業において最も重要な要素とされる灌漑用の土手（ジスル）の管理に関する 14 世紀後半に起きた政治的慣習の変遷を分析する。

第 2 章では、14 世紀前半のマムルーク朝の大規模水利事業を手掛かりに、ナイル治水に関する政治的慣行を検討する。水利事業の中に見られる技術的側面にも留意し、1325 年にカイロ西部に建設されたナースィル運河を例に取り上げ、14 世紀前半の治水慣行の変化について分析を行う。第 1 章で取り上げた灌漑に関わる水利慣行の変化との共通性、平行性について考察を行う。

第 3 章では、引き続き 14 世紀後半の大規模水利事業の慣習と特徴について検討する。特に黒死病がエジプトで猖獗を極めた 1348 年の翌年に行われた、通称ジスル・マンジャクと呼ばれるカイロ郊外のナイル川で行われた政府主宰の水利事業を取り上げる。黒死病の前年 1347 年から始まったカイロのナイル河岸における渇水は飲料水の高騰や水運に支障を与え、首都の都市機能にも影響を与えた。ジスル・マンジャクはこの渇水を解消することを主たる目的としたが、この水利事業が示すナースィル・ムハンマド没後の水利事業の変化をその建設過程の詳細を通して、14 世紀後半の行政慣行の変化について考察する。

第 4 章では、ナイル灌漑、および治水事業において重要な役割を果たしたと考えられる、地方行政官について取り上げる。バフリー・マムルーク朝時代のエジプトの諸地方にはアミールの中から選任されたワーリーと呼ばれる地方行政官が派遣され、スルターン直轄のイクター、政府管理の灌漑土手の整備、アミールたちのイクター地における徴税の監察などを行ったと考えられている。また、14 世紀にはワーリーに加えて上・下エジプト両地域に派遣されたカーシフと呼ばれる地方行政官が派遣されたことが知られる。これらの地方行政官の制度的な変遷を通して、エジプトの地方統治の様相を概観するとともに 14 世紀から 15 世紀にかけてのエジプトにおける政治・社会的変動との関連を考察する。

結論においては、各章の分析結果から得られたマムルーク朝統治下の 14 世紀を中心とするナイル治水行政とそれに関わる地方行政制度に現れた政治・社会の変動についての各知見をまとめ、今後の研究課題と展望を提示する。

4．結論

本論文では、バフリー・マムルーク朝（1250–1382 年）における、スルターン・ナースィル・ムハンマド第 3 期治世から、ブルジー・マムルーク朝（1382–1517 年）にいたる 15 世初頭までを対象として、エジプトのナイル川を利用した灌漑水利、治水とその管理・維持に関わった地方行政官の制度的な変遷を対象として考察を行った。ナイル川流域というエジプトの地域的な特徴と、イクター制を基としたマムルーク朝の統治システムとの間で発生した行政上の慣行の変化から、当時のマムルーク朝の政治・社会上の変動がいかなる諸相として現れたかについて具体的事例を基に検討した。本論文において各章で行った考察と得られた新たな知見について以下に示す。

第 1 章では、エジプトにおけるナイル川を利用した灌漑農業の管理について、コプト農事暦、ミクヤースにおけるナイル川の増水の計測、政府管理のジスルの管理といった実務的側面から、マムルーク朝時代においても、イスラーム以前から継承された慣習がアラブ化、またはイスラーム化しながら、イスラーム以降の徴税システムなどの新しい慣習との共存していった様子が観察された。特に、徴税と深いかかわりを持つ「政府管理のジスル」については、バフリー・マムルーク朝時代の政治、社会的変動により 14 世紀後半にはその慣習が衰退するだけでなく、ナイル灌漑設備の維持管理がムクターたちにより直接管理されるようになった可能性を指摘した。

第 2 章では、マムルーク朝の中央政庁が主宰するナイル川の大規模な水利事業についてその行政慣行の特徴について考察を行った。ナースィル運河の掘削事業を中心にその過程を検討した結果、14 世紀前半の大規模水利事業に共通する政治慣行として、アミールらイクター受給者による作業の分担が見られたが、この事業では建設区間に土地を所有するアミールにその義務が課せられた点に特徴がある。

カイロ西部地域におけるナースィル運河をはじめとする一連の運河掘削事業には、大きく 2 つの目的があった。第一にナースィル・ムハンマドの新たな政治拠点であるスィルヤークースに建設した宮殿とハーンカーと、首都カイロとの間の結合を運河によって強化すること。第二にカイロ西部における交通網の整備を行い土地の利用価値を上げ、同地域の経済的な発展の基礎を形成することにあった。このように、ナースィル運河をはじめとするカイロ西部地域で掘削された運河は複合的な目的を果たすように計画的に行われた水利事業であったことを指摘した。また、水利事業の技術的側面を見ると、船舶の航行を可能とするために、ナースィル運河をはじめとする複数の運河をミスル運河に結合させ、流水量を増加させる手法

は、当時のマムルーク朝において水利に関する知識が高く、それを担う技術者の存在が大規模水利事業の実施を支えていたと言える。

第3章では、ジスル・マンジャク建設の過程から、14世紀後半の水利行政の変化を考察した。1341年にナースィル・ムハンマドが没すると後継のアミールたちによる権力闘争により政治的混乱が発生した。加えて、1348年にエジプトで発生した黒死病をはじめとする疫病の流行により農村人口が激減し、貧困者の都市部への流入など農村社会の弱体化は、14世紀後半のマムルーク朝の社会に大きな変化をもたらした。この影響がジスル・マンジャクの建設過程においては、第2章で見られたような14世紀前半の水利事業における行政慣行を踏襲することが困難となったと考えられる。その結果、軍人から都市住民にいたるまで臨時税の課税対象として税を徴収する、それまでに見られなかった行政手続きが採られた。

イクター受給とそれに対する軍事奉仕というマムルーク朝の基本的な軍事支配体制において、農村経営の弱体化はイクター収入を基本とするマムルーク体制に変化をもたらし、労働力の集約が必要な水利事業にその影響がより早く表面化したことが確認できた。臨時税の徴収により政府主宰の水利事業が執行されたことは、それまでのマムルーク軍人へのイクター受給に対する奉仕義務の一環である労働力の供出という、14世紀前半までに見られるスルターンとアミール、マムルーク軍人らの相互関係における政治慣行に現れた変化の一つとして考えられる。

第4章では、マムルーク朝初期には毎年各地の徴税のため、灌漑施設を監督するために百騎長のアミールと各地方単位でワーリーを派遣していたが、ナースィル検地を境に行政区域も整理され、四十騎長のカーシフを上・下エジプト地域に、各地方には四十騎長、十騎長のアミールを中心とするワーリーが各地に派遣するようになり、制度の整備が進んだ。ただし、地方の数とワーリーの人数のバランスは時代によって変更が加えられていった様相が窺え、スルターンの直轄地には複数のワーリーが派遣される時期もあった。カーシフの基本的な役割は検地以前の百騎長が担っていた時代の職務内容を引き継いでいることも確認された。この体制は地方行政官数や地域編成については時代ごとに変遷が見られたが、基本的に14世紀中には維持された。

ワーリーとカーシフの関係について言えば、マムルーク朝のイクター制度下においては、イクター地の管理を頻繁に交代するムクターに委ねるだけでなく、ムクターを管理・監督するために各地方にワーリーを派遣したが、同時にワーリーも各地で職権を利用した不正、収奪が見られたため、それを監督し統括するカーシフの設置が不可欠となっていたことが窺える。また、カーシフがナイル川の増水を利用した農業の鍵を握る灌漑土手の管理を担っていたことにも、マムルーク朝政府における地方管理の基本的方針、地理的範囲設定、各地域の相互関係を考える上で留意する必要がある。14世紀後半の社会の不安定化と農村社会の弱体化はウルバーンによる反乱も増加させ、これに対応する形でカーシフに、例として取り上げ

た盲目のアズダムルのように軍事的な経験が豊富なものが選任されるようになったと考えられる。バルクークによってウルバーン対策が強化され、ナーイブが設置されると、カーシフは各地方単位で派遣されるワーリーと同様の行政官へと変化した。14 世紀の段階では、完全にカーシフとワーリーが一致していたわけではなく、灌漑・徴税のほかに治安維持を目的とした面も見られた。例えば下エジプト地域のカーシフは比較的ウルバーンが多く住むシャルキーヤ地方であった。ウルバーン勢力を抑えるために、その首長をカーシフに任命することで治安維持をウルバーン自身に委任する事例も見られたが、バルクーク没後にウルバーンの反乱が減少するとナーイブ職は廃止され、カーシフが上・下エジプト地域にそれぞれ 3 人ずつ派遣され、ワーリーと同様に地方単位で派遣される行政官としての制度が定着することとなった。

一方で、ワーリーとして任命される地方行政官の事例は減少し、15 世紀中葉にはエジプトの辺境地域のみとなった。これに伴い各地方における地方行政官の職務はカーシフに集約され、16 世紀のオスマン朝時代に引き継がれる地方行政制度の祖形が成立したと考えられる。これを踏まえ今後は、15 世紀中葉から後半期にかけての地方統治の変遷について検討するとともに、16 世紀オスマン朝統治下のエジプトの地方行政制度、カーシフ職の変遷を対象に前近代エジプトにおける地方支配の構造について、イスラームの統治理念を含めたエジプト政治、社会の連続性と非連続性に着目しつつ考察を進めていきたいと考えている。